

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19500579  
研究課題名（和文） マルチレベルからみた心理社会的学校環境が児童生徒の健康格差に与える影響  
研究課題名（英文） Multilevel effects of psychosocial school environment on health and well-being among young people  
研究代表者  
高倉 実（TAKAKURA MINORU）  
琉球大学・医学部・教授  
研究者番号：70163186

研究代表者の専門分野：学校保健，疫学  
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・応用健康科学  
キーワード：学校保健，ヘルスプロモーション，心理社会的要因，抑うつ症状，危険行動，児童生徒，マルチレベル

### 1. 研究計画の概要

児童生徒にとって、日中のほとんどを過ごす学校生活における様々な出来事や経験は、人格形成や学業成績だけでなく彼らの健康状態にもきわめて大きな影響を及ぼすものと思われる。近年、WHOをはじめとする欧米の研究者は、学校生活の中で、学校満足や学校関連ストレス、社会的支援などを含む包括的な心理社会的学校環境と児童生徒の健康結果との関連性に注目した概念モデルを提案しており、多くの研究により、支援的・受容的な学校環境は保健行動や主観的健康、well-being の発達の資源となり、一方、非支援的・ネガティブな学校環境はこれらの危険因子となることが示唆されている。

我々は、心理社会的学校環境概念モデルを適用して、わが国の児童生徒の健康状態を説明することを試みてきた。これまでに、当モデルの構成概念妥当性および信頼性の評価を行い、同時に概念間と自覚症状との関連性や因果構造を明らかにした。また、心理社会的学校環境と生体的ストレス指標や抑うつ症状、危険行動との関連性を示唆する知見を報告してきた。

上述の先行研究は主として心理社会的学校環境に対する個人レベルの認知過程を中心に扱ってきたが、児童生徒の健康結果には、個人レベル要因だけでなく、学校や学級の健康方針や雰囲気・風土といった集団レベルの共通環境要因も何らかの影響を及ぼしていると考えられる。したがって、心理社会的学校環境の健康影響を理解するためには、個人レベル要因と集団レベル要因の両方を考慮

し、マルチレベルの現象としてモデル化することが必要となる。これまで、わが国の児童生徒の健康結果についてマルチレベルの要因から検討した研究は皆無であったことから、学校・学級レベル要因の健康影響の程度はほとんど明らかになっていない。本研究は、わが国の学校保健分野におけるマルチレベル研究の嚆矢となる。

本研究の目的は、小・中・高校の児童生徒を対象として、個人の心身の健康状態および健康危険行動に個人レベルおよび集団レベルの心理社会的学校環境要因がどのような影響を及ぼしているかについて明らかにすることである。

### 2. 研究の進捗状況

#### (1) 平成 19 年度

沖縄県那覇市の全公立中学校 17 校の 1～3 学年（計 102 学級）に在籍する中学生 3,733 名を対象に質問紙調査を実施した。本研究の主な目的変数は抑うつ症状、主な説明変数は心理社会的学校環境である。結果は以下の通りである。1) 抑うつ症状の級内相関係数（ICC）を算出したところ、学級レベルの ICC が学校レベルの ICC よりも大きく、抑うつ症状の変動が学校よりも学級の違いによってより説明されることが示された。2) 個人レベルの抑うつ症状と心理社会的学校環境要因との相関係数の多くはある程度の大きさを示したが、中でも学校満足との関連が最も強かった。3) 中学生の抑うつ症状を説明するために、心理社会的学校環境要因の一つと

して学校満足を用い、学級を変量効果としたマルチレベルモデルを検討した。個人レベルの学校満足および共変量、学級レベルの学校満足（学級平均）を同時投入したところ、個人レベル変数を制御した後も学級レベルの学校満足が個人レベルの抑うつ症状に関係していることが明らかになった。

#### (2) 平成 20 年度

沖縄県全域の全日制県立高等学校 29 校の 1~3 学年（計 87 学級）に在籍する高校生 3,248 名を対象に質問紙調査を実施した。結果は以下の通りである。1) 危険行動の ICC はある程度の大きさを示し、危険行動の学校間分散は有意にばらついていた。2) 喫煙、飲酒、性行動を目的変数、個人・学校レベルの学校満足を説明変数、学校を変量効果としたマルチレベル分析の結果、個人レベル変数を制御した後も学校レベルの学校満足が喫煙や飲酒に影響していた。

#### (3) 平成 21 年度

沖縄県全域の公立小学校 31 校の第 5・6 学年（計 132 学級）に在籍する小学生 4,503 名を対象に質問紙調査を実施した。結果は中高校生とほぼ同様であった。小学生の抑うつ症状を目的変数、個人・学校レベルの学校満足を説明変数、学校を変量効果としたマルチレベル分析の結果、個人レベル変数を制御した後も学校レベルの学校満足が抑うつ症状に影響していることが明らかになった。

以上のことから、児童生徒の健康結果に対して、集団レベルの学校満足の文脈効果（contextual effect）が及んでいることが示唆された。

#### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。  
（理由）

現在までの研究計画および研究方法は、概ね研究計画調書に記載したように順調に実施しているとともに、想定した研究仮説を支持する成果が得られている。また、本研究で得られた成果を第 56 回日本学校保健学会において学会長講演として発表した。

#### 4. 今後の研究の推進方策

平成 22 年度は本研究で得られた知見を学術論文や学会発表でさらに公表していく予定である。また、心理社会的要因の一つとして、ソーシャルキャピタルの観点から、その個人レベルおよび集団レベルの健康影響について検討していく予定である。

#### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1. Takakura M, Wake N, Kobayashi M. The contextual effect of school satisfaction on health-risk behaviors in Japanese high school students. *Journal of School Health* (in press) (査読有) .
2. 高倉実. 学校力を挙げてすべての子どもに豊かな健康を:マルチレベルからみた心理社会的要因が子どもの健康に影響する. 学術の動向 (印刷中) (査読無) .

〔学会発表〕（計 12 件）

1. 高倉実. 学会長講演「すべての子どもに豊かな健康を」. 第 56 回日本学校保健学会, 2009 Nov. 28-29, 那覇.
2. Syokida Y, Iha Y, Takakura M. The associations between academic aspiration, socio-economic status, and depressive symptoms among junior high school students in Okinawa, Japan. The 41st Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference, 2009 Dec 3-6, Taipei.
3. 高倉実, 岸本梢, 小林稔, 和氣則江, 宮城政也. 高校生の危険行動にみられる学校・学級レベルの変動について. 第 55 回日本学校保健学会, 2008 Nov. 15-16, 名古屋.
4. 岸本梢, 高倉実, 和氣則江, 小林稔, 宮城直也, 新垣早和子, 伊波由美子, 辻本しおり, 金城さくら. マルチレベルからみた学校満足度が中学生の抑うつに与える影響. 第 55 回日本学校保健学会, 2008 Nov. 15-16, 名古屋.
5. Kobayashi M, Takakura M, Kurihara A, Sasazawa Y. Influence on junior high school students of the psycho-social school environment and lifestyle. The 19th IUHPE World Conference on Health Promotion and Health Education, 2007 June 10-15, Vancouver.